

ベトナム戦争と国立公園

親 泊 素 子*

1. はじめに

世界ではじめて国立公園が誕生したのは1872年、アメリカのイエローストーン国立公園である。この国立公園が成立した時に語り伝えられたのは、H. D. ワッシュボーン探検隊の美談である。ワッシュボーン将軍を隊長とする探検隊がイエローストーン地域を発見した時に、その自然美に驚嘆し、こういった景勝地を探検隊の隊員達だけで分けて、それぞれの私有地としてしまうのではなく、国が永久に保存し、国民の為に公園として残すべきであるという提案から国立公園というものを誕生させたといわれている。しかし、また、この国立公園を誕生させた背景には、当時、イエローストーン地方の北方を通過する鉄道の建設計画があり、鉄道資本家のJ.クックが経済的利益の為に議会へ強い後押しをしたとか、建国まもないアメリカは、ヨーロッパ諸国に比べ歴史も浅く、誇るべき文化もなければ、人々のアメリカという国に対するナショナリズムも希薄であった。したがって、多民族国家であるアメリカとしては、国民共通のナショナリズムを高めるシンボルとして国立公園が使われたのだと解釈する研究者もいる⁽¹⁾。

日本の国立公園も、「国のすぐれた自然の風景地を保護するとともに、その利用の増進を図り、もって国民の保健、休養及び教化に資する」ことを目的としてつくられてきたが、やはり初期の成立の大きな動機は経済政策によるものだった。それは1929年にはじまる世界恐慌の中で、国際観

光の振興による外貨獲得を意図したものであったのである⁽²⁾。

国立公園は英語で National Park だが、この“National”という語をめぐって、戦前に日本が公園制度をつくる時に、学者や政治家の間で議論が飛び交った。それは「国立公園」と言う言葉を、「国が管理する公園」(Nationally-governed)と解釈するのか、あるいは「国民の公園」(People's Park)とするかという議論である。結果的には国立公園を核とした観光開発を期待する地方に受け入れられた解釈は、「帝国公園」、あるいは「天皇のお墨付きをもらった公園」であり、地元から熱狂的に歓迎され、国立公園の誘致、指定運動が起こったのである⁽³⁾。このように同じ国立公園でも日米でその成立の背景が異なるように、世界各国の国立公園制度の誕生をひもといてみると、その背景にさまざまな政治、経済、社会的意図を含みつつ制度をたちあげていることがわかる⁽³⁾。

ベトナムが最初の国立公園として、クック・フォン地域を指定したのは1962年である。この年というのは第二次インドシナ戦争、すなわちベトナム戦争でアメリカが南ベトナム援助軍司令部(MACV)を設置し、本格的にベトナム戦争への介入を始めた頃である。常識的に考えれば、自然保護とレクリエーション利用を目的とする国立公園制度のようなものを、戦争が本格化する時期に成立させるとは考えにくい。

そこで本論では、ベトナム戦時下にベトナム政府が国立公園を成立させた意図は何だったか、またどうして、それが可能だったかを明らかにすると共に、ベトナムの国立公園の現状についてまとめてみた。

* 江戸川大学 環境デザイン学科教授

キーワード：ベトナム戦争、国立公園、クック・フォン、ポー・クイ

2. ベトナム戦争の始まり

ベトナム戦争はフランスとの第一次インドシナ戦争に続いて起こったものとして、第二次インドシナ戦争と呼ばれているが、また、「小文字の戦争」とも呼ばれている。それは戦争開始の正式な宣戦布告がなされなかったために、その始まりが定かでないからだ。1959年1月13日に北ベトナム労働党第2期第15回党拡大中央委員会が南部での武力解放を決定〈第15号決議〉した日だという人もいれば、1960年12月20日の南ベトナム解放民族戦線をタイニン省で設立した日という人もいる。また、1961年4月29日にアメリカがジュネーブ協定を無視して軍事顧問などの増派を決めた日と考える人もいる。また、1964年に始まったアメリカの報復爆撃〈ピアス・アロー作戦〉や、1965年の北ベトナム攻撃〈北爆〉開始の時期と見る人もいる。戦争の終了も、1973年1月27日のパリ調印の日とか、同年3月の米軍撤退完了、もしくは1975年4月30日のサイゴン陥落の日であったりとはっきりとしないが、いずれの場合にも、この小国ベトナムは、大国アメリカと8年から10年近い戦いを続けたことになる⁽⁴⁾。

結果は北ベトナムの勝利に終わったが、一説によると、アメリカのベトナム戦争の敗因は、ベトナムの国土が森林で守られていたために、この森林がベトナムの民族解放戦線側に隠れ家を提供するだけでなく、アメリカ側の目をくらます防護壁の役割を果たしたからだと言われている⁽⁵⁾。しかし、この戦争の悲劇はこれらの森林に潜むベトコンを一掃するために使用された枯葉剤、マグネシウム爆弾、ナパーム弾によって多くの森林を消滅させたことである。ベトナムは1943年から75年の約30年間に全国土の6割近い2,200万ヘクタールの森林及び農地が戦争による被害を受けた⁽⁶⁾。

人的被害としては、アメリカの戦死者が5万8千人、負傷者が320万人に対し、ベトナム側の戦死傷者の数は総計300万人で、枯葉剤による被害は100万人にのぼるといわれている。精神的ダメージを受けた数は600万人、さらにボートピープル

等で海外脱出を図った難民の数は1,000万人近くといわれている。さらに、投下された爆撃の量は約1,600万トンで、ベトナムの貴重な生態系はことごとく破壊された。ちなみに、第二次世界大戦で日本に投下された爆弾の量が16万トンといわれ、その100倍近い量が、日本より小さい国ベトナムに投下されたのである⁽⁷⁾。

3. ベトナム国立公園成立の背景

クック・フォン国立公園は、ハノイの南西約120キロメートルに位置し、ニンビン省、ホアビン省、タインホア省の三つの地区にまたがる面積22,250ヘクタールの公園である。このクック・フォン地域の貴重な森林を最初に調査したのが、「ベトナムの自然保護の父」として知られるボー・クイ (Vo Qui) 氏である。ボー・クイは戦前、地方の中学、高校で教鞭をとっていたが、第一次インドシナ戦争が終結し、1955年にハノイ大学がハノイに戻されると、ボー・クイも1956年にハノイ大学に招聘され、生物学の講義をもつようになった。翌年の1957年、ボー・クイはハノイ大学生物学科の学生のために研究フィールドを持つ必要性を感じ、ハノイ周辺でフィールドにふさわしい場所を探し始めた。ハノイ近郊の自然地域を何ヶ所か見て回ったが適当なフィールドが見つからず、ついには、その当時あってはまだまだ辺境の地としてとらえられていたクック・フォン地域へ行ってみることにした。クック・フォン地域まではかなりの距離があったのだが、3日かかりで、列車と徒歩を利用して現地調査に出かけて見た。そして、このクック・フォン地域が原生林豊かな森林に被われ、生物多様性にも富んだ地域である事がわかり、ここを学生のためのフィールドとして利用する事を決めた。しかし、またこの貴重な原生林は保護すべきであるとも考え、それを当時のハノイ大学の学科長であったド・フー・タイ教授 (Duong Huu Thoi) に相談したところ、幸いにも、このド・フー・タイ教授は専門であった植物学をアフリカで学んできており、アフリカの国立公園や保護地域についての知識をもってい

たので、クック・フォン地域を保護地域にすることが話し合われた。また、ポー・クイ教授もレニングラード大学で植物学を学び、中国へも9ヶ月行って中国の森林保護区の存在をみていたという⁽⁸⁾。

その他、副学科長で動物学のダオ・ヴァン・ティエン〈Dao Van Tien〉教授やレ・ヒエン・ハオ (Le Hien Hao) 教授、植物学のファン・ケー・ロック〈Phan Ke Loc〉教授も加わり、クック・フォン地域を保護区として指定するよう政府に働きかけた⁽⁹⁾。しかし、1959年、北ベトナムは祖国統一を決断し、その年末の12月20日には、ゴ・ディアン・ジェム政権の独裁を打倒するために民族解放戦線 (NLF) がカンボジア国境沿いのタイニン省で結成され、戦闘体制に入っていたのであった⁽¹⁰⁾。

一方、この時期のアメリカは単独で南ベトナム防衛に乗り出せる条件を整え、南ベトナム政府軍に対ゲリラ戦訓練を施したり、1961年には、反乱鎮圧計画 (CIP) を作成し、南ベトナムを経済、軍事面で援護することによって南ベトナムの民主化を実現させようとしていた。しかし、すでに行動を開始していた北ベトナムを鎮圧するには時間のかかる戦略であり、軍関係者は、この計画では間に合わないと感じていた。当時の統合参謀本部議長だったマックスウェル・テイラー将軍は、ベトナムを「破壊活動による反乱、すなわち、ホー・チ・ミン戦略がありとあらゆる形を取って試されている、活動中の実験室」と称する一方、北ベトナムを指揮していたヴォ・グエン・ザップ国防相は、「現代の民族解放戦争のひな型」としてこの戦いを捉えており、いよいよこの戦争が本格化していく局面をむかえていたのである⁽¹¹⁾。

こういった状況の中で、1962年7月7日に森林の保護と科学研究を目的としてクック・フォン地域は禁止林〈Prohibited Forest〉として指定された。禁止林とは、森林地域内での人の行動を禁止するという意味であり、一種の森林保護区である。その結果、北ベトナム政府は国防大臣のヴォ・グエン・ザップを通じて、クック・フォン地域への軍隊の駐留や武器の持ちこみを一切禁止した。

これらの情報は政府から各省庁を通じ、ラジオや新聞などにも報道され、アメリカ軍の知るところとなった。その結果、アメリカ政府も反政府ゲリラの拠点と思われる森林地域への爆撃を強めたにもかかわらず、この地域への爆撃だけは避けたのである。皮肉にも、その結果、クック・フォンの森林地域は最も安全な地域となり、それまでは200名ほどの少数民族が居住していたのが、疎開先として数千人の人々が移り住み、それらの人々による森林伐採などの自然破壊が問題化した。しかし、戦火から逃れた森林の被害は最小限に押さえられ、貴重なベトナムの原生林は今日まで守られたのである⁽¹²⁾。

それにしてもすばやい決断であった。通常でも政策決定には時間を要する社会主義国のベトナムにあって、こういった戦時下に自然保護に関する法律がこれほどすばやく決議されたのはなぜだったのだろうか？

4. 戦時下における国立公園指定成功の要因

いくつかの要因があげられるが、最も大きな要因はベトナム社会の特徴の一つともいべき地縁、血縁関係の深さに関係がある。ベトナム社会における地縁とは、出身地が同じで親兄弟や祖先を知っているという相互に認知した関係が基本であるが、同じ地区で抵抗運動や戦争を一緒に戦った同志の間柄でも連帯感が強いという⁽¹³⁾。

ハノイ大学のポー・クイ教授をはじめとする生物学科の教授たちはクック・フォン地域を保護区として残してもらおうべく、政府の農業省森林局長のグエン・タオ (Nguyen Tgao) 氏に願い出たところ、この提案にグエン・タオはすぐに賛同した。なぜなら、彼は歴代の森林局長の中でもとりわけ森林保全に力をいれていた人物として知られており、しかもポー・クイ教授のいここにあたる人物であった。したがって、即座に話が理解されたことはいうまでもない。さらにそこからホー・チ・ミン国家主席へ届くのに時間がかからなかった。それはその背景にグエン・タオとホー・チ・ミンの間に特殊な関係があったのである⁽¹⁴⁾。実

はこのグエン・タオは、ホーチミンが1925年6月に結成した「ベトナム青年革命同志会」の会員として反仏運動に加わり、ホー・チ・ミン国家主席、首相のファン・バン・ドン氏、副首相で共産党中央委員のグエン・ルオン・バン氏、国防相のヴォ・グエン・ザップ等と第一次インドシナ戦争当時、プロコンドール島の監獄に収容された仲間だったのである。また、彼等は5人とも侵略に対する抵抗的風土が強かった中部地方ゲアン省の出身でもあり、共産党員や民族解放運動に携わったものとして度々投獄された経験をもっていた⁽¹⁵⁾。

彼等の出身地のゲアンというところは、乾季には熱風が吹きおろす暑熱地獄の地域で、雨期には度々台風による被害で洪水が発生し、自然の猛威に悩まされていた地域だった⁽¹⁶⁾。痩せた農地に加え、このような過酷な気候の中で、人々の生活は常に貧しく、そのために、逆境に立ちむかう強い反骨精神をもっており、ゲアンは「反抗」と言う言葉で語られるほど、革命や反乱の舞台となってきた土地であった⁽¹⁷⁾。特に1929年に始まる世界恐慌は農村をさらに困窮化させ、1930年9月にゲアンで旱魃が起ると、多くの人々は更なる飢えで苦しみ、ついに中部ゲティンで反税闘争をおこした。数千人の農民が役所に向かって行進し、ベトナム共産党もこれを好機として大規模な蜂起に踏みきり、地主の財産を没収し、農民に分配したり、労働者と共に「ゲティン・ソヴィエト」を組織した⁽¹⁸⁾。しかし、ゲティン・ソヴィエトは鎮圧され、ファン・ヴァン・ドンや、ヴォ・グエン・ザップらは逮捕され、プロコンドール島の監獄に収容されたのである⁽¹⁹⁾。その後1936年、フランスの総選挙でフランス人民戦線が勝利し、レオン・ブルム内閣を発足させた時に恩赦を受け、いったんは釈放されたが、1939年の第二次世界大戦の勃発で、フランスが再び弾圧をし始めると中国に逃走し、ソ連から中国に入ったホー・チ・ミンと一緒に、再度ベトナムへ戻り戦う準備を整えた仲間だったのである⁽²⁰⁾。彼等はベトナムの独立と自由を目指して戦い、生き延びた同志として結束を強めていった。したがって、グエン・タオ森林局長、ホー・チ・ミン国家主席、ファン・

バン・ドン首相、グエン・ルオン・バン副首相、さらにヴォ・グエン・ザップ国防相とは役職を超えた熱き友情と強い絆で結ばれていたのである⁽²⁰⁾。

また、ホー・チ・ミンはベトナムの民族解放と独立を掲げてフランス、日本、米国と戦った政治的指導者としてだけでなく、自然をこよなく愛したエコロジストでもあった。ホー・チ・ミンは生前から質素な生活を実践しており、有名な長いあごひげに簡素な人民服はいうまでもなく、彼は使い古したタイヤから作った“ホーチミンサンダル”を常に履き、伝統的な作りの木造の家や洞窟に住んだ。そのうちの一つは現在、ハノイ市内で観光の名所となっているが、そこを訪れると彼の質素なライフスタイルを理解できる⁽²¹⁾。

ホー・チ・ミンは中部ゲアン省キム・リエン村出身で、洪水等の自然の猛威に悩まされた地域だったところから、森林保全の重要性は他の人以上に認識していたに違いない。ホー・チ・ミンは、「ハノイの都市は戦火で破壊されても再建できるが、クック・フォンの原生林の再生は不可能である。」と述べたと言う。また、実際に1960年からホー・チ・ミンは国の植林運動を奨励し、その時すでに戦争終結後の国造りを意識していたともいわれる⁽²²⁾。

また、首相のファン・バン・ドンは広東でホー・チ・ミンの指導を受けて以来、最も忠実な弟子として認められ、1951年から1982年まで共産党政治局員として勤め、首相に任命された人物である。また、副首相のグエン・ルオン・バンは出身がホー・チ・ミンと同じ中部地方ということから、インドシナ共産党中央委員の構成委員に選ばれ活動していた。こうした奇跡的な血縁、地縁の深さが、クック・フォン地域を保護地域として戦時下に成立させることができたのである⁽²³⁾。

また、ハノイ大学の生物学科の教授陣もベトナム戦争にそれなりの役割をこなした。従軍した植物学者は戦地において食用植物を兵士に教えたり、漢方薬となる薬用植物で傷の手当てを行っていた。また、ボー・クイ教授自身、戦時中から枯葉剤の影響や戦争が生物に与える影響を調査するために

激戦の地域にも足を運んでいた。調査をつづけていた研究者の中には敵と間違えられ拷問にあった者もいる⁽²⁴⁾。当時のクック・フォン地域の森林調査にかかわっていた林業研究所の職員は、「我々が戦争中に国立公園を作ったのは、北ベトナムがこの戦争に勝利すると信じており、そのあかつきには優れた国が当然もっているべき国立公園をベトナムにもあってしかるべきだと思っていたからだ。」と述べている⁽²⁵⁾。

5. 戦後の国立公園の発展

1975年にサイゴンが陥落し、ついにベトナムの南北統一が行われたが、このベトナム戦争で犠牲になったベトナム国民の数は300万人、国土は焼け、多くの森林が失われ、国は完全に疲弊きっていた。ところがこれに追い討ちをかけるように、1978年にはふたたびカンボジアの侵攻が始まった。ポルポト派は国内基盤を反ベトナム・ナショナリズムで克服しようと国境で紛争を起こした。ポルポト派は中国と結びつきベトナムを挟撃したため、ベトナムは反ポルポトと結びつき、カンボジア侵攻を開始し、その結果、ベトナムは国際社会で、カンボジアへの侵略者としての烙印を押され孤立していった。さらに1979年にはカンボジア侵攻を非難した中国がベトナムを侵略し、中越戦争が始まった。1981年にはソ連からの援助も打ちきられ、ベトナムは経済的に追いこまれていった⁽²⁶⁾。

そこで、1986年12月に第6回の党大会が開催された時に、書記長に選出されたグエン・ヴァン・リン氏が「ドイモイ」を国家目標として宣言した。このドイモイ政策の中に経済政策とならんで環境政策が盛り込まれ、国の経済発展には環境保全も車の両輪のごとく必要であると述べられた⁽²⁷⁾。その結果、ドイモイ政策と同時にベトナムの「国家保全戦略」も作られた。この時にこの「国家保全戦略」策定の指揮にあたったのがポー・クイ教授である。この「国家保全戦略」が策定された時に、時の総司令官だったヴォ・グエン・ザップは、「これは戦略中の戦略である。」と述べ、その重要

性を示唆した⁽²⁸⁾。この「国家保全戦略」の中で、ベトナムに国立公園をつくることが含まれ、ベトナムはIUCN（国際自然保護連合）の指導と援助を受けながら近代的な国立公園制度を成立せしめた⁽²⁹⁾。

しかし、その運用については、国立公園法に基づくものではなく、森林法の中の特別利用林を国立公園地域と定めたもので、林業とのバランスがむずかしい。南北統一後、最初の指定をうけた国立公園は、1986年に指定されたカット・バ国立公園である。この公園は、現在では世界遺産地域にも指定されているハロン湾に浮かぶカット・バ島にあり、一部の海域も国立公園として指定されているが、また、この国立公園にはゴールデンラングールという珍しい固有のサルも生息しており、生物多様性が豊かな公園である⁽³⁰⁾。

その後、次々に国立公園が指定され、2003年2月現在では、126ヶ所、総面積2,541,675 haの特別利用林が指定されているが、これは国土総面積の約7%にあたる。さらに、2003年6月27日には「2010年に向けてのベトナムの保護地域制度に関する管理運営戦略」が承認され、生物多様性の保全と持続可能な発展を目標とした管理指針が作成された⁽³¹⁾。

しかし、いずれの公園においても最大の問題はこの国立公園内に居住する地域住民問題である。それはベトナムがアメリカ型の営造物の公園設立を目指し、地域住民を国立公園地域から移動させてきたからである。その地域住民というのは山間に住む山岳少数民族で、かつてのベトナム戦争では険しい山々を縦横無尽に動けるとして、前線にかりだされ、浸透監視の中心的役割を担っていたかつてのベトコンたちであった⁽³²⁾。

現在、ベトナムには54の民族がおり、そのうち、ベトナムの97%の人口をしめるのがキン族であり、のこりの53が少数民族である⁽³³⁾。しかも、多くの少数民族はまさに国立公園に指定された山岳地域の高地にすむ民族が多く、彼等は国立公園の地域指定をされた後、強制移住をさせられてきた。しかし、本来高地での生活になれている彼等にとって、平地への移住は彼らの生活文化を



ベトナムの国立公園図

出典：「National Parks of Vietnam」(2001年)

破壊するものであった。また、政府が与えた代替地は肥沃な土地と言うには程遠く、ごつごつした岩場で土地も痩せており、移住を条件に支払われた一時金はたちまちのうちになくなり、彼らは再び国立公園内の森林資源を生活の糧として頼る他に生活を支える方法はなかった。しかし、国立公園内の資源を取る事は法律で禁られており、密猟、違法な伐採は後を立たず、現在でもベトナム国立公園管理の大きな問題点となっている⁽³⁴⁾。

6. 結 論

ベトナム最初の国立公園となったクック・フォン地域は1960年初期に発見され、1962年7月7日の政府決議72/TTgによって国立公園の指定を受けた。正式にはこの時には森林保護区ともいえる禁止林指定であり、国立公園という名称での指定は1965年である⁽³⁵⁾。しかし、ベトナムでは1962年をもってベトナム国立公園成立の年としている。現在、この国立公園の敷地内に生息する植物種は1,990種、哺乳類97種、鳥類319種、爬虫類36種、両生類17種、昆虫類1,800種と生物多様性豊かな国立公園として国内外の観光客に人気の場所である。特に人々を引きつけているのが、「幻の椿」といわれる黄色い椿 (*Camellia vidalii*) であり、日本では金茶花とも呼ばれるようである。この珍しい椿を見るためにわざわざクック・フォン国立公園を訪れる日本人もいるという。さらに、珍しい種類の霊長類もおり、無数の蝶が舞う公園は実に美しい。さらに、クック・フォン国立公園は考古学的にも注目すべきであった。それはベトナム最初の人類ではないかといわれる人骨や墓、石器類などが発見された洞窟も数カ所あり、さらに公園内にはムオン族をはじめとする少数民族も居住しており、近年は彼等を巻き込んだエスニックツーリズムも行われるようになってきた。さらに、ベトナム最初の国立公園として初のビジターセンターの建設も行われ、霊長類のレスキューセンターとともに観光客の人気を集めている⁽³⁶⁾。

「国を興すには木を植えよ」という言葉がある

が、ホー・チ・ミンはそれを信条としており、1969年に亡くなった彼の遺言の中に、「丘陵には石碑、銅像を立てず、訪れた人々が記念に木を一本植える。日がたてば森林となり、景色も良くなり、農業にも役立つだろう。管理は古老達に委ねて欲しい。」と述べているが、また、別の遺言には、「アメリカの侵略に対する抵抗戦争は長引くかもしれない。しかし、我々は全面的勝利まで、アメリカの侵略者と戦う事を決意していなければならない。我々の河、我々の山、我が人民は常に存続するだろう。」と書き残し⁽³⁷⁾、ホー・チ・ミンの頭の中には、ベトナムの民族解放運動というのは祖国を守ることであり、それは当然自然を守ることでもあるのだと理解されていたのである。

また、戦争が本格化する前にこのような貴重な原生林を守る法律が出来たのは、ボー・クイ教授とグエン・タオ森林局長が血縁関係にあったことだけではなく、グエン・タオ森林局長と、ホー・チ・ミン国家主席、ファン・バン・ドン首相、グエン・ルオン・バン副首相、ヴォ・グエン・ザップ将軍という国のトップ指導者とがかっての第一次インドシナ戦争以来の革命の同志であり、地縁関係で結ばれていたと言う事実が大きい。

ベトナムは2000年にベトナムの保護地域の見直しを行い、その再編を実施した。同時に国立公園の指定を次々に行い、2003年までの3年間で今までの倍以上の28ヶ所の国立公園が指定された。ベトナム政府はこの国立公園増加の理由をさらなる生物多様性の保全が必要である事を力説すると同時に、エコツーリズムを推進したいとの意向を示している。しかし、現実にはエコツーリス

ベトナムの保護地域 (2003年現在)

| 分類 | 数 | 面積 (ha) |
|--------|-----|-----------|
| 国立公園 | 27 | 957,330 |
| 自然保護地域 | 60 | 1,369,058 |
| 自然保護区 | 49 | 1,283,209 |
| 種/生息地 | 11 | 85,849 |
| 景観保護地域 | 39 | 215,287 |
| 陸地/海中 | | |
| 合計 | 126 | 2,541,675 |

出典：Management Strategy for a Protected Area System in Viet Nam to 2010.

ムというより、マスツーリズムの推進という見方が強い。特に外国人観光客の誘致に力を入れており、外国資本を導入し、大型のホテルの建設を進めている。このままではベトナムの国立公園は観光利用のための開発で、本来の生物多様性の保全是むしろ危険にさらされる率が高い。皮肉にも、現在、ベトナムを訪れる外国人観光客数の多い国はフランス、アメリカ、日本といった、かつてベトナムが自国の民族独立のために戦いを挑んだ国々である。もう一度ベトナム最初の国立公園成立の志を振り返るべきではないだろうか。

《注》

- (1) Alfred Runte, *National Parks: The American Experiences*, Lincoln: Univeristy of Nebraska Press, pp. 33-47.
- (2) 親泊素子, 『第9章日本の国立公園とランドスケープ』『ランドスケープの新しい波』, 株式会社メイプルプレス, 1999年, pp. 139-142.
- (3) 親泊素子, 『国立公園事始』, FRONT, 財団法人リバーフロント整備センター, 2001年, p. 17.
- (4) 松岡 完, 『ベトナム戦争』, 中央公論新社, 2001年, pp. i-ii.
- (5) Interview with Prof. Hoan Hoe, Former Director of Vietnam Inventory and Forestry Association, Hanoi, Vietnam, 6 Nov. 2003.
- (6) Ibid.
- (7) 坪井善明, 『ベトナム「豊かさ」への夜明け』, 岩波書店, 1994年, pp. 184-185.
- (8) Interview with Prof. Vo Qui, Professor Emeritus, Hanoi University, Hanoi, Vietnam, 6 Nov. 2003.
- (9) Ibid.
- (10) 松岡, 前掲, p. 17.
- (11) 松岡, 前掲, pp. 20-21.
- (12) Vo Qui, loc. cit.
- (13) Ibid.
- (14) Ibid.
- (15) 小倉貞男, 『物語ベトナムの歴史——億人国家のダイナミズム——』, 中公新書, 1997年 p. 331.
- (16) 同上, p. 321.
- (17) Vo Qui, loc. cit.
- (18) 松岡, 前掲, pp. 59-60.
- (19) Vo Qui, loc. cit.
- (20) Ibid.
- (21) Ibid.
- (22) 坪井, p. 111.
- (23) Vo Qui, loc. cit.
- (24) Ibid.
- (25) Ibid.
- (26) Interview with a former employee of FIPI (林業試験場及び計画所), Hanoi, Vietnam, Feb. 1995.
- (27) 坪井, pp. 146-182.
- (28) Ibid.
- (29) Ibid.
- (30) Vo Qui, loc. cit.
- (31) VNPPA (Vietnam National Parks and Protected Areas Sub-Association) ed., *National Parks of Vietnam*, Agricultural Publishing House, Hanoi, 2001, pp. 81-82.
- (32) MARD (Ministry of Agriculture and Rural Development) ed., *Proposed Management Strategy for a Protected Area System in Vietnam 2003-2010*, Vietnam Trade Union Printing Company, 2002, pp. 27-28
- (33) Dang Nghiem Van, Chu Thai Son, and Luu Hung, *Ethnic Minorities in Vietnam*, Hanoi: The Gioi Publishers, 1993, pp. 5-15.
- (34) The Socialist Republic of Vietnam, *Management Strategy for a Protected Area System in Viet Nam to 2010*, Hanoi: Duy Thanh Company, 2004, p. 28.
- (35) VNPPA, pp. 106-117.
- (36) Ibid.
- (37) 小倉貞男, 前掲, p. 351.